



TITLE:

月明の中の李白

AUTHOR(S):

興膳, 宏

---

CITATION:

興膳, 宏. 月明の中の李白. 中國文學報 1992, 44: 60-91

ISSUE DATE:

1992-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177520>

RIGHT:

## 月明の中の李白

興膳

宏

京都大學

李白の詩において、月は酒とともに最も好んで詠われる事物である。武部利男氏によれば、月の出てくる詩は「三百首をこえる」<sup>(1)</sup>し、また姫默氏によれば、四百箇所あまりで月が描かれているという。<sup>(2)</sup>李白の詩に描かれる月について論じた文章も、前記武部・姫兩氏や松浦友久氏の論考<sup>(3)</sup>など、管見に觸れたものだけでもたちまち數篇が挙げられる。何も今さら「李白と月」でもあるまいさ、と私自身思わぬではない。その目新しくもないテーマをここでことさらに取り上げるのは、諸氏の議論に反駁したいからではなく、それらを承知した上で、ややちがった角度からこの問題に切り込んでみたいからである。

例えば武部氏は、李白は月の比喩的表現として鏡と弓を用いた例が比較的多く、「鏡の場合は仙郷の幻想を天真爛漫にえがき、弓の場合は邊境の現實を印象鮮明にうつす。全體として單なる比喩からぬけ出し、類型を破り、實感を伴う表現となっている」といい、また松浦氏は月あるいは月光が李白の心をとらえた主要な原因として、(一)「月の永遠性、不變性、といった性格」、(二)「その超越性、あるいは不可觸性」、(三)「月光のもつ感覺的な特色、とくにその透明、清澄な感覺」の三點を指摘している。いずれもその通りであろうと、私も同意する。したがって、かかる點についてはできるだけ重複を避けて、觸れないような心がけるつもりである。疣贅の論たることを惧れつつも、敢えて一つの問題提起に挑戦する氣にさせるのは、それだけ李白の描く月の含意が深いからであろうか。

さて、李白の月について論ずる前に、まず中國の詩に現われる月の最大公約的なイメージについて確認しておく必要がある。共通性の理解の上に立つてこそ、李白の獨自性も始めて認識できるからである。第一に、中國の詩で描

かれる月の大多數は、満月あるいはそれに近い圓い月であること。月は常に満ち缺けをくり返す。劉熙『釋名』釋天に、「月は、缺なり。満つれば則ち缺くるなり」、また「朔は、蘇なり。月死すれば復た蘇生するなり」というように、人間の眼から見える月は絶えずその姿を変えている。圓い満月も、細い新月も、月の多様な相の一つのはずだが、中國の詩では、圓い月が斷然細い月を壓倒している。

同じ圓い月にしても、完全な圓の状態を呈するのは十五夜の月だけだが、わが國ではその前後の月を十三夜・十四夜・十六夜・十七夜と呼んで、その微妙な形の變化を歎賞する。また「いざよい」(十六夜)、「立待」(十七夜)、「居待」(十八夜)、「寢待」(十九夜)と、月出の時間の變化をも形體の變化に併せて樂しもうとするところがある。その底に流れるのは、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」(『徒然草』第百三十七段)ということばによって代表されるような、必ずしも圓満な相のみを貴ばず、不完全な相にもそれ獨自の良さを見出そうとする日本人の美意識であろう。しかし、中國には古來それに相當するような

ことばも考えもない。十三夜・十四夜、そして十六夜・十七夜の月も、それぞれに特有の美があるとされるのではなく、いつてみれば十五夜の月の近似値であることにおいて貴ばれるにはかならないのである。

『詩經』で月を美的な對象として描くのは、月光を女性の美しさと交錯させる陳風「月出」が思い出されるくらいであり、<sup>(4)</sup>『楚辭』でも月の美しさに目が向けられるに至らない點では、まさに同斷といつてよい。美しい存在として認識される月がしばしば現われるようになるのは、漢の樂府や古詩になつてからである。

明月何皎皎 明月何ぞ皎皎たる

照我羅牀幃 我が羅の牀幃を照らす

「古詩十九首」其十九

昭昭素明月 昭昭として素き明月

暉光燭我牀 暉光 我が牀を燭らす

「傷歌行」

兩者はともに冒頭の一聯で、皎々と寢室に射しこむ月光を寫し出すことにおいて相い似るが、續く二句でそれぞれ

「憂愁して寐ぬる能わず、衣を攬りて起ちて徘徊す」、「憂人寐ぬる能わず、耿耿として夜何ぞ長き」と、人の憂いを觸發する媒介として月を配置する點でも共通している。この狀況設定は、次代の曹植「七哀」《文選》卷二十三のやはり冒頭で、一段と華やかさを増しつつ重層的に引き繼がれている。

明月照高樓 明月 高樓を照らし

流光正徘徊 流光 正に徘徊す

上有愁思婦 上に愁思の婦有り

悲歎有餘哀 悲歎 餘哀有り

ところで、これらの詩に描かれる月の形については何も具體的な説明はないが、「明月」の語から誰もが想像するのは、やはり満月あるいはそれに近い月であろう。「明月之珠」といえば、完全な球状の大眞珠を意味するように、「明月」の語自體が實は月の形狀を指示している。

三五明月滿 三五 明月滿ち

四五蟾兔缺 四五 蟾兔缺く

「古詩十九首」其十七

のような例になると、「明月」と十五夜の結びつきは、もはや疑いようがなくなる。例はこのほかにもなお擧げることができ、魏晉あたりまでの詩に現われる月は、ほとんどすべてがこうした圓滿な相を呈するものであった。月は滿ち缺けをくり返して不斷に形を變へる存在ではあるが、古い時代の詩人の目を引いたのは、ほとんど圓い月だけだったということになる。

もちろん月が缺けることへの關心が詩中に見られなくはないことは、いま擧げた「古詩」に「四五 蟾兔缺く」と、月の換喩（蟾兔）を用いて詠われる通りだし、より古くは『楚辭』の「天問」に、「夜光は何の徳ありてか、死すれば則ち又た育まる」と、月の死と再生に言及されている例が想起されよう。しかし、満月ならぬ細い月を美の對象として取り上げた詩となると、宋の鮑照（四一四？～四六六？）の「月を城西門の廨中に翫ぶ」《文選》卷三十）あたりが、早い時期の作品であろう。その冒頭部を引いておく。

始見西南樓 始めて西南の樓に見わるるに

纖纖如玉鉤 纖纖として玉鉤の如し

末映東北輝

末に東北の輝に映ゆるに

娟娟似娥眉

娟娟として娥眉に似たり

娥媚蔽珠櫺

娥媚は珠櫺に蔽われ

玉鉤隔瑣窗

玉鉤は瑣窗に隔てらる

三五二八時

三五二八の時

千里與君同

千里 君と同じからん

この詩は新月から満月への時間の推移を描きつつ、二つの異なった相の月のいづれをも愛でる氣持を示している。

ほっそりとした三日月は「玉鉤」に譬えられ、また「娥（蛾）眉」に譬えられる。<sup>(5)</sup>「娥眉」はいうまでもないが、「玉鉤」

も「陌上桑」の「桂枝もて籠の鉤と爲す」といった句を念頭に置けば、そこに若く美しい女性の姿が連想されないので

もない。梁章鉅『文選旁證』が、「紀文達公胸」云えらく、娥眉・玉鉤の四字は、始めて此の詩に見われて、遂に典故

を成すと」というように、月を描きながら美女のイメージを二重映しに浮かび上らせる効果によって、詩における一

つの技法を開拓することになった。以後、「眉」や「鉤」の語で初月を比喻することは、ほとんど常套的なパターン化

月明の中の李白（興膳）

の傾向をたどる。また梁武帝「遊女曲」の「容色は玉のごとく耀きて眉は月の如し」や、范靜の妻「映水曲」の「雙蛾は初月に擬す」のように、美女の眉を喩えるのに初月を持ち來たる逆の關係の比喻も現われる。李白の描く初月のイメージにしても、「鉤」や「眉」の比喻を頻用して、いささか型にはまった印象を免れたいが、詳しくは武部論文の第三・四章に譲る。

こうした使い古されたパターンを離れた初月を描き出すのに成功した詩人は、杜甫を以て嚆矢とするといつてよからう。杜甫はもはや「娥眉」によって譬えられるようなかわく美しい存在としてのみ初月を詠ずるのではなく、吉川幸次郎氏のことばを借りれば、「淒涼」な景物として形象している。吉川氏は「杜甫と月」と題する論文で、まず「杜甫の詩に現われる月色は、しばしば淒涼である」と文を起し、月色の下での淒涼な風景を列舉したあと、さらにことばを繼いで次のようにいう。

以上は、満月、もしくはそれに近い月を詠じての、淒涼さであるが、ほのかな三日の月も、淒涼なものと

して詠ぜられがちである。秦州での「初月」が、光細弦初上、影斜輪未安、光は細くして弦は初めて上に、影は斜めにして輪未だ安からず、でおこり、庭前有白露、暗滿菊花團、庭前に白露有り、暗かに菊花に満ちて團なり、で結はれるのをはじめ、はじめて成都に着いた夜の古詩「成都府」の、初月出不高、衆皇尙爭光、初月出づること高からず、衆星尙お光を爭う、晩年の七律「夜」の、新月猶懸雙杵鳴、新月猶お懸かりて雙杵鳴る、みなその例である。

ここには引かれていないが、杜詩初期の名作「夜宴左氏莊」の首聯――

風林纖月落 風林 纖月、落ち

夜露淨琴張 夜露 淨琴張らる

も、もっぱら美女の眉に比擬される杜甫以前の初月の描寫中に置いてみると、格段に新鮮な印象を覺える。

さて、論を元に戻せば、六朝中期以後の詩においては、このように不完全な形狀の月に對する關心も決して少なくはないのだが、大勢は依然として圓滿な月の方にある。そ

して月を中心とする狀況設定にも、よく見ればそこにおのずと一つの定式が見出される。先に擧げた鮑照の詩では、「三五二八の時、千里 君と同じからん」とあって、遠く隔たった二人の人物が中天に懸かる月を見上げつつ、相手の身を思いやるといふ構圖が浮かびあがる。圖式化していえば、月を頂點とする三角形である。鮑照と同時代の謝莊「月賦」(『文選』卷十三)にも――

美人邁兮音塵闕 美人邁ゆきて音塵か闕

隔千里兮共明月 千里を隔てて明月を共にす

と、全く同じパターンが見られる。離れ離れになった相思の男女が、時を同じくして、かの戀しい人もいまこの明月を眺めやっていると(7)思っている。すでに見た「古詩十九首」其九の「明月何ぞ皎皎たる」は、「客行は樂しと云うと雖も、早く旋歸するに如かず」とわが家への思いが詠われているから、潜在的にはこの構圖に適っているともいえようが、はつきりと例の三角形を畫くのは、やはり鮑照や謝莊の句に始まるといってよさそうである。

ずっと下って杜甫「月夜」の――

今夜鄜州月 今夜 鄜州の月

閨中只獨看 閨中 只だ獨り看ん

は、一見すると妻の住む鄜州の月だけに焦點が絞られているかのようだが、實は作者のいる長安の空に月が浮かんでおり、それを媒介にして遠方に在る妻に思いを馳せているのである。一方の主體が巧みに隠されているが、やはり同じ型に屬することは疑いない。六朝中期から唐にかけての詩から例を拾えば、まことに枚舉にいとまないのだが、いま一つだけ有名な句を擧げておくと、白居易「八月十五日夜、禁中に獨り直し、月に對いて元九を憶う」の――

三五夜中新月色 三五夜中 新月の色

二千里外故人心 二千里外 故人の心

は、いまさら説明の要がないほどの典型例である。月の圓かさと、それを見つめる二人の間に横たわる遙かな距離が、數字を用いて效果的に示されている。

缺けるところのない圓い月は、その完全性によって團圓の象徴となる。後世、俗に舊曆八月十五日を團圓節と稱し、里歸り中の妻もこの日には必ず夫の家に歸るといふ風習が

月明の中の李白（興膳）

あったのもそれに由來するし、家族そろって中秋節に月餅を食べるのも、またそれに因んでいる。<sup>(8)</sup>共に住むべき夫と妻が不本意にも生き別れ状態にあるとき、満月は二人にとっての正常な願わしかるべき姿を暗示する。それが親子、戀人、親友であっても、同じことがいえる。團圓の状況にない人は、明月を仰ぎながら、團圓の回復を切に願って、今どこか遠くにいるはずの相手の身を思いやるのである。そのとき、明月は現在の悲しみを喚起する存在であるとともに、未來についての希望を與える存在でもあるだろう。以上述べてきた月のイメージの一般的な役割は、もちろん李白の場合とて例外ではない。しかし、一方また李白の詩に現われる月が、そうした概念だけで處理しきれない部分を餘りにも多く持っていることも事實とせねばならない。これからそうした李白獨自の月のイメージに目を向けてゆくことにしよう。

二

李白に、「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」（峨眉山月歌、蜀僧

晏が中京に入るを送る」という七言古詩（王琦注本卷八。以下、李白詩の卷数は、すべて王注本を指す）がある。中京は、すなわち長安。肅宗の至德二年（七五七）十二月に西京が中京と改められ（『舊唐書』肅宗紀）、上元二年（七六一）にまた西京の稱に復した（『新唐書』地理志）という史實から、この間の數年に繋けられる李白晩年の作品である。<sup>9)</sup>

我在巴東三峽時 我 巴東三峽に在りし時

西看明月憶峨眉 西のかた明月を看着峨眉を憶う

月出峨眉照滄海 月は峨眉に出て滄海を照らし

與人萬里長相隨 人と萬里 長く相い隨う

黃鶴樓前月華白 黃鶴樓前 月華白く

此中忽見峨眉客 此の中 忽ち見る峨眉の客

峨眉山月還送君 峨眉山月 還た君を送り

風吹西到長安陌 風吹いて西に到る 長安の陌<sup>まち</sup>

長安大道橫九天 長安の大道 九天に横たわり

峨眉山月照秦川 峨眉山月 秦川を照らす

黃金師子乘高座 黃金の師子 高座に乗り

白玉塵尾談重玄 白玉の塵尾 重玄を談ず

我似浮雲滯吳越 我は浮雲に似て吳越に滯まり

君逢聖主遊丹闕 君は聖主に逢いて丹闕に遊ぶ

一振高名滿帝都 一たび高名を振いて帝都に滿たば

歸時還弄峨眉月 歸る時 還た弄で峨眉の月

第三聯に「黃鶴樓前 月華白く、此の中 忽ち見る峨眉

の客」とあるように、李白と蜀僧晏が出會つた場所は、武

昌の黃鶴樓である。この蜀僧、李白の詩に登場するのはこ

こだけだが、郷里を同じくする二人は、或いはかねてから

の知りあいだったのかも知れない。折りしもこの名高い高

樓の上空には、皓々として萬里を照らす明月が懸かつてい

る。しかし、李白が描き出すのは、月光の下に廣がる眼前

の光景であるよりも、主客二人の過去・未來の行跡に連な

る遠い各地の月である。李白はかつて「巴東三峽」にいた

が、いまこの武昌の地を経てさらに長江を下り、「吳越」

の彼方を目ざしている。そして一方の蜀僧はといえは、こ

れから自分とは逆に西のかた帝都長安へと向かう旅中にあ

る。要するに二人は、現在という時間・空間の座標軸上の

ただ一點においてたまたま相いまみえているほかは、それ

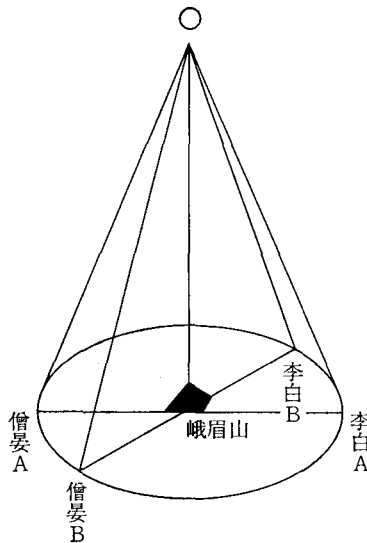


その内なる行動紀律の命ずるままに、互いに没交渉にこの世界を渡り歩いている。然るに月は、「人と萬里 長く相い随い」つつ、彼らの行く先々すべてにくまなく光を投げかける。すなわちすでに確認したような、友情の絆としての明月のイメージをそこに見出すことができる。

だが、この詩における月の役割はそれだけにとどまらない。月は李白と僧の赴くすべての土地を照らすとともに、また常に二人の共通の故郷である峨眉山上に懸かっている。「峨眉」の語が、二人の位置の變化に呼應するかのようにより、反復表現として頻繁に現われることに注目する必要がある。つまり月は彼らの心を引きつけてやまぬ郷里の山上にいつも確實に在るものとして描かれ、二人の望郷の思いを切實なものとする作用を果しているのである。いいかえれば、二人の所在がどこであろうと、彼らの心は、あの峨眉山上に輝く明月のように、絶えず故郷に向かっている。遙かに山河を隔てた故郷に對して二人の放浪者が抱く親しさと切なさ、そうした思いが月に託されているとしてよい。この一首に描き出された明月は、これまで見てきたように、普

月明の中の李白（輿膳）

遍的な月のイメージを踏まえつつ、望郷の情というもう一つの役割を附託することによって、友情と郷愁とがいわば二つの焦点のように、互いに效果的に機能しあっている。南宋の嚴羽がこの詩の技法を評して「主伴變幻の法」というのは、その妙味をよくいい當てたものであるう。



この詩における月と主客の位置關係を假りに圖示するとすれば、月を頂點とする標準的な三角形ではなく、圓錐狀の立體を考えるのが似つかわしいであろう。月というこの圓錐の頂點から垂線を下ろすと、そこには必ず峨眉山があ

る。そして月と峨眉山を結ぶ直線を軸として圓錐を任意に切斷すると、そこには無數の三角形が現われ、その底邊の兩端には、いつも僧晏と李白がいる。僧晏への友情は、このような圖形的な理解をも可能にするようだ。

「峨眉山月歌」と題される詩が、李白にはもう一首ある。七言絶句のこの一篇（卷八）の方が、恐らくより多く人口に膾炙する作といえようが、制作時期も前掲の古詩とは對照的に、ほとんどの注釋者が二十代半ば蜀を出る時の作としている。

峨眉山月半輪月

峨眉山月 半輪の月

影入平羌江水流

影は平羌江の水に入りて流る

夜發清溪向三峽

夜 清溪を發して三峽に向かう

思君不見下渝州

君を思えども見えず 渝州に下る

故郷のシンボル峨眉山に懸かる半輪の月。「半輪月」は、片われ月とも解しうるが、山の端に上半部だけ姿を現わした圓い月かも知れない。いずれとも決めがたいところが一つの妙味である。水面に影を落す月とともに清溪の宿驛を出發したが、途中で高い山に遮られて月影は見えず、あき

たりぬ思いのままに渝州へと下っていく。結句の「君」は、一般に月を指すと考えられている。李白ならではの發想だが、その月を仰ぎ見たいと願う思いは、單に美しい月影に魅せられてのことではなく、それが峨眉山の上に出ているがゆえに、ひとしお慕わしさをそそのものである。月を中天に仰ぐ限りは、愛する故郷と遙かに隔たつていようとも、なお一つの世界を共にするという慰めを得ることができ、つまりこのとき、月——峨眉山——故郷という連環が、一つの契約として成立したことになる。

この「峨眉山月歌」が、通説のように李白二十四五歳の出郷の作であり、先の蜀僧晏を送別した同題の古詩が、六十歳前後の最晩年の作であるとしてよいならば、月と峨眉山と故郷を結ぶ連環は、李白の心情の中で絡始變らず持續していたと考えてよいのではないか。中間項の峨眉山を除いて、月と故郷が直接的に結びつく詩句も、以下のように珍しくない。

天借一明月

天 一明月を借りて

飛來碧雲端

飛來す 碧雲の端

故郷不可見 故郷 見る可からず  
腸斷正西看 腸斷えて正に西を見る

「遊秋浦白筍陂」其二(卷二十)

夢邊邊城月 夢は邊る 邊城の月  
心飛故國樓 心は飛ぶ 故國の樓  
思歸若汾水 歸るを思えば汾水の若く  
無日不悠悠 日として悠悠ならざるは無し

「太原早秋」(卷二十二)

寥落暝霞色 寥落たり 暝霞の色  
微茫舊壑情 微茫たり 舊壑の情  
秋山綠羅月 秋山 綠羅の月  
今夕爲誰明 今夕 誰が爲にか明らかなる

「秋夜獨坐懷故山」(卷二十三)

いづれの詩においても、月を媒介として望郷の情が觸發されている。杜甫の「露は今夜從り白く、月は是れ故郷の明り」(「月夜憶舍弟」)のように、他の詩人にも月と故郷が直接結びつく句はもちろんあるが、李白のようにそれが頻度高く現われることはやはり特別であろう。名篇「靜夜思」

月明の中の李白(興膳)

(卷六)も、當然この系列の中に位置づけて考える必要がある。

牀前看月光 牀前 月光を見る

疑是地上霜 疑うらくは是れ地上の霜かと  
舉頭望山月 頭を擧げては山月を望み  
低頭思故郷 頭を低れては故郷を思う

「山月」と「故郷」との関係が、これ以上明白な表現はない對句によって指示されている。安旗主編『李白全集編年注釋』は、この詩を開元十五年(七二五)李白二十七歳の年に繫げ、その「思郷の情」は前年の「秋夕旅懷」(五古、卷二十四)に似ると評するが、同篇でも月が故郷への思いを掻き立てる役割を果していることに變りはない。中間の――

目極浮雲色 目は浮雲の色に極まり

心斷明月暉 心は明月の暉かがやきに斷たる

は、すでに胸迫るふるさとへの心情を表出しているが、末尾の二句はその思いをより明確なことはで確認する。

含悲想舊國 悲しみを含みて舊國を想い

泣下誰能揮

泣<sup>なみだ</sup>下りて誰か能く揮わん

この李白における月と故郷との強い結びつきは、月に對する親近感の強さを示すものでもある。故郷に寄せる熱い思いを託すゆえに月が親しみある存在なのか、あるいは月に親しみを持てばこそ月のイメージを通じて望郷の情が詠われるのか。そのいずれもが眞實の半面ずつをいい得ているように思われる。

このように故郷という身近に意識される存在と特定のコードによって結びつけられる月は、また家族や友人といった親しい人々への直截的な心情表現の具としてもしばしば用いられる。七絶「聞王昌齡左遷龍標遙有此寄」(王昌齡が龍標に左遷さるるを聞き、遙かに此の寄有り。卷十三)は、そのいみじきものの一つである。

楊花落盡子規啼

楊花落ち盡して子規啼く

聞道龍標過五溪

聞道<sup>きくたち</sup>く 龍標 五溪を過ぐと

我寄愁心與明月

我は愁心を寄せて明月に與う

隨風直到夜郎西

風に隨<sup>た</sup>い直ちに夜郎の西に到らん

龍標は、現在の湖南省黔陽縣。この僻遠の地に任に赴く

旅中に在る友人に向かって、自分の心が常に君と共にあることを呼びかけるのだが、その使者の役割をつとめるのが明月である。「我は愁心を寄せて明月に與う、風に隨い直ちに夜郎の西に到らん」の句は、沈德潛がいうように『唐詩別裁集』卷二十)、初唐・齊澣「長門怨」(『全唐詩』卷九十四)の「心を將<sup>も</sup>りて明月に寄せ、流影 君が懷に入らん」の意を用いているのだが、閨怨詩の常套的な甘さの漂う「長門怨」の設定が、友の身を氣づかう緊迫感に溢れた心情表現にみごとに轉化を遂げている。友情の絆としての明月をここにも見出すことができるが、「愁心」という抽象的なものを、「明月」という普遍的なイメージに假託する發想を通じて、メッセージの受け手である王昌齡の側からすれば、月は發信者李白その人の分身としての意味をも持つことになるだろう。五言古詩「送張舍人之江東」(張舍人の江東に之くを送る。卷十六)でも、相い似た役割を託された月のイメージを窺うことができる。

張翰江東去

張翰 江東に去り

正值秋風時

正に秋風の時に値う

天清一雁遠　天清くして一雁遠く

海闊孤帆遲　海闊くして孤帆遅し

白日行欲暮　白日　行くゆく暮れんと欲し

滄波杳難期　滄波　杳として期し難し

吳洲如見月　吳洲　如し月を見ば

千里幸相思　千里　幸いに相い思え

月を頂點として二人の隔たりあつた人物を結びつける例の三角形、つまり明月のイメージの一般的なコードがここにも作用していることはいうまでもないが、月を見たら自分のことを思い出してくれという呼びかけは、月と李白を結ぶ紐帯がやはり特別に強いものであることを思わせる。王琦の注は謝莊「月賦」の「千里を隔てて明月を共にす」(六四ページ参照)を引くが、李白と月との心理上の距離感はずっと近くなっている。

五言古詩「自梁園至敬亭山見會公談陵陽山水兼期同遊因有此贈」(梁園自り敬亭山に至り、會公に見えて陵陽の山水を談じ、兼ねて同遊を期す、因って此の贈有り。卷十二は、全四十句から成る長い詩で、會公の話に出てきた陵陽の山水にす

月明の中の李白(興膳)

っかり心を惹かれ、何とかしてその地に遊んでみたいという切なる願望を詠っている。陵陽山は、李白が會公と出會つた敬亭山(安徽省宣城縣の北)から西南のかたに位置し、むかし寶子明なる人物がここから鶴に乗って昇仙したという傳説のある地である。

我隨秋風來　我　秋風に隨いて來たり

瑤草恐衰歇　瑤草　衰歇を恐る

中途寡名山　中途　名山寡し

安得弄雲月　安んぞ雲月を弄するを得ん

詩はこの一節から始まる。秋風に吹かれるままに北のかた梁園を發つてはるばる南の地へと下ってきたが、さて途中にはさしたる名山とてなく、これでは雲や月を愛でる氣にもなれぬというのだが、月ははやここに現われて、後半に展開される主題の伏線をなしている。長江を渡るとすでに秋も深まって、黄葉が飛びかう中、ここ敬亭山にたどり着いた。この山の明るく清らかな情景がすっかり氣に入つて、暫くここにとどまることにしたが、それが會公と出會うきっかけともなった。會公はなかなかの名僧で、說法雲

のごとく湧き出でるかと思えば、繪筆を執ってもひとかどの腕まえ。かくひとしきり會公への贊辭に筆が費されたあと、さてその僧が物語る陵陽山のすばらしさ。

爲余話幽棲 余が爲に幽棲を話し

且述陵陽美 且つ陵陽の美を述べ

天開白龍潭 天は開く 白龍潭

月映清秋水 月は映ず 清秋の水

陵陽山にひきこもる僧は、この土地の美景としてまず白龍潭を擧げる。その昔、寶子明が釣り上げた白龍をこの潭に放ち、やがて五年後、白龍の導きで子明は陵陽山上で仙化を遂げたといわれる。傳説に彩られる神祕の池は、秋のさやかな月光の下にひとときわ美しく照り映える。その陵陽山の彼方には、黃山そして石柱山と、名だたる突兀とした峰々が稠疊と無限にひしめきあって、鳥さえも越えかねるという。

聞此期振策 此を聞いて策を振わんと期すも

歸來空閉關 歸來 空しく關を閉ざす

相思如明月 相い思うこと明月の如く

可望不可攀 望む可くして攀ず可からず

會公の話を聞いて、すっかり陵陽山の雰圍氣に魅せられてしまい、何とか一たび遊びたいと願っているが、實現できぬまま今に至っている。彼の地に思いを馳せながらそこに至りえぬはがゆさ、あるいは心理的な距離の近さと空間的な距離の遠さのくいちがい、それを明月に借りて表出しているのがいかにも李白らしい。「酒を把りて月に問う」(卷二十)に、「人 明月に攀ずるも得可からず」と詠われるように、月に親しみを抱けばこそ、そこに登れないことが恨めしいのである。

何當移白足 何か當に白足を移して

早晚凌蒼山 早晚 蒼山を凌ぐべき

且寄一書札 且く一書札を寄せて

令予解愁顏 予が愁顔を解かしめよ

いつかあなたが自ら山頂を極められるその時には、せめてお便りでも下さいという希望を述べて、詩は結ばれている。以上見てきたように、この長い詩の發端と中間と末尾に月が配置されて、陵陽山と會公への親近感を盛り上げる

のに効果を擧げている。

五古「自代内贈」(自ら内に代りて贈る。卷二十五)は、家を出たきり放浪を続ける自分に向けられた妻の思いを代辯して詠うという構想になっているが、妻の目から見た二人の關係を比喩的に描く次のような句がある。

妾似井底桃 妾は井底の桃に似て

開花向誰笑 花を開くも誰に向かいて笑かん

君如天上月 君は天上の月の如く

不肯一回顾 肯て一たびも回り照らさず

長い間の別居生活で互いに顔を合わせる機會のない夫婦を喩えるのに、井底でひっそりとさく桃花と天上に掛かる明月とを以てしている。「桃花」の詩という顯著な先行例があるように、桃花は女性の美のシンボル。ただその輝かしい魅力は、もちろん異性あつてのものである。然るに詩中の妻は、井という閉ざされた狭い空間で人知れずさく桃花のように、空しい思いをかこっている。うらめしいのは天上の月、くまなく世界を照らしているはずなのに、その光はついに井底に届かない。月を望んで遠行の夫の身を想

月明の中の李白(興膳)

う妻の姿は、閨怨詩の一般的な構圖だが、この詩のように夫そのものを月に比擬することは珍しい。月は親近感を託す身近な存在でありながら、同時に遙かな距離に隔てられた手の届かない存在という二重の意識がはたらいでこそ、この詩のような比喩が成り立ちうるのではあるまいか。

「南流夜郎寄内」(南のかた夜郎に流されて内に寄す。卷二十五)では、明月の射しこむ樓中に在って、音信のない遠方の妻の身を案じている。

夜郎天外怨離居 夜郎 天外 離居を怨み

明月樓中音信疏 明月樓中 音信疏なり

北雁春歸看欲盡 北雁 春に歸りて 看るに盡きん

と欲す

南來不得豫章書 南來 得ず 豫章の書

「明月樓中」の句は、曹植「七哀」の冒頭、「明月 高樓を照らし、流光 正に徘徊す。上に愁思の婦有り、悲歎餘哀有り」のエコーを聞くべきかも知れない。明月はここでも、相手に對する心理的な距離の近さと、空間的な距離の遠さを同時に示唆するイメージとして理解することがで

きる。「離居を怨む」のは作者自らの氣持であるとともに、妻の李白に對する思いでもあるはずだ。その相手の切ない心情を、明月というシンボルを通して詩人は感知している。それだけに豫章からの音信の届かないのが、何とも氣がかりでならないのである。

こうした一連の「明月」の描かれる詩を考察してきて、最後にどうしても觸れざるを得ないのは、阿倍仲麻呂の遭難を哀惜した「哭晁卿衡」(卷二十五)である。

日本晁卿辭帝都 日本の晁卿 帝都を辭し

征帆一片遶蓬壺 征帆一片 蓬壺を遶る

明月不歸沈碧海 明月、歸らず 碧海に沈み

白雲愁色滿蒼梧 白雲愁色 蒼梧に滿つ

碧海に沈んでもはや歸らぬ「明月」が仲麻呂の死を意味することはいうまでもないが、詩のイメージとしてはもう一步進んだ検討がなされてもよい。安旗・薛天緯・閻琦『李詩咀華』(一九八四年、北京十月文藝出版社)は、晁卿の目ざす故國日本が大海の東に在って、日月の昇る方角に當るところから、彼の歸國を明月に喩えたとし、また明月に

よって彼の高潔な人からと衆に秀でた才能を比擬したとしている。<sup>105</sup>それは十分ありうることだ。しかし、イメージのはらむ内容は重層的であることを排除しない。李白が遙かな地に在る親しい者のみに許した明月のイメージは、この詩の場合にも十分にその機能を果しているのではあるまいか。

そういえば、仲麻呂が歸國を前に明州(寧波)で作ったとされる歌――

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも  
『古今和歌集』卷九

は、やがて自分が歸りゆくべき奈良の三笠山の上に出た月に望郷の思いを託している。これがすでに見た二篇の「峨眉山月歌」における月と峨眉山の関係と同じ構造になっているのは、全くの偶然なのだろうか。A・ウェイリー氏は、仲麻呂の死を悼む詩が「明月」に言及していることから、「仲麻呂が出發にあたって書いた詩を李白は知っていたように思われる」(小川環樹・栗山稔譯『李白』注⑬参照)といっている。もしそうであれば、仲麻呂はことさら李白



の發想を意識して例の歌（ウェイリー氏は、原作は漢詩だったとする）を作り、さらに李白はその仲麻呂の作を頭に置いて、彼を哭する詩を作ったという推測も成り立つだろう。

いずれにしても、李白と仲麻呂の詩想の間に、月をめぐる共通のコードが見出されることは、きわめて興味ある事實とせねばなるまい。

李白を終生敬慕した杜甫が、秦州に在ってこの先輩の身を案じての作「夢李白」其一には、夢に李白を見たあと、現實に立ち返ってわが周邊を見まわす場面がある。

落月滿屋梁 落月 屋梁に滿ち

猶疑照顏色 猶お顏色を照らすかと疑う

この句を得たとき、杜甫はやはり李白獨特のあの明月のイメージを、意識のどこかに置いていたのかも知れない。あれほど月に親しんだ李白であればこそ、この月光の下、わが夢に現われるのはふさわしいともいえるし、しかし現實にはその生死さえ定かでないことが痛まれてならないのである。

### 三

よく知られる李白の名篇の一つに、「金陵城西月下吟」（卷七）がある。

金陵夜寂涼風發 金陵 夜寂として涼風發し  
獨上高樓望吳越 獨り高樓に上って吳越を望む

白雲映水搖空城 白雲 水に映じて空城を揺るがし

白露垂珠滴秋月 白露 珠を垂れて秋月に滴るしたた

月下沈吟久不歸 月下 沈吟して久しく歸らず

古來相接眼中稀 古來相い接するは眼中に稀なり

解道澄江淨如練 道を解す 澄江は淨きこと練のねろ

如しと

令人長憶謝玄暉 人をして長く謝玄暉を憶わしむ

この詩では全篇にわたって月明の中の情景が描かれるが、後半部に至ると、心を分かちあえる人は古來まことに少ないと歎じつつ、その稀有の人物として、南齊の詩人謝朓がその有名な詩句とともに回想されている。

餘霞散成綺 餘霞は散じて綺と成りあやぎぬ

澄江淨如練 澄江は淨きこと練の如し

「晩に三山に登りて京邑を還望す」『文選』卷二十七に見えるこの二句は、夕映えの下に廣がるねりぎぬのように清く平らかな水面を描いて、確かに深い印象を与える。李白はいま、月光を映して白く輝きわたる江を前にして、この名句を想起し、改めて謝朓に對する敬慕の情を新たにしている。

ところで、ここで注目したいのは、李白がいま月を仰ぎながら、遠く時間を隔てる過去の人物を回想していることである。明月が空間的に隔てられた二人を結ぶ媒介として頻用されることはすでに述べた通りだが、この詩では空間軸が時間軸に置き換えられている。いいかえれば、月を仲立ちにして古人と對話を交わしているのである。月のイメージがこのように時間を超越させる作用を果すことは、他の唐詩人にあるはなお普遍的ではない。然るに、李白の詩にあってはしばしばこうした例に遭到する。「把酒問月」（酒を把りて月に問う。卷二十）の一節は、彼が月に寄せるこのような思いを説明してくれている。

今人不見古時月 今人は古時の月を見ざるも

今月曾經照古人 今月は曾經て古人を照らす

人こそ知らね、月はずっとこうして人間の歴史を見わたしているのだ。だから人間の側からいえば――

古人今人若流水 古人今人 流水の如く

共看明月皆如此 共に明月を看ること皆な此の如し

つまり月を媒介として、古人と今人は時間の懸隔を乗りこえ、一つに結びつけられているといえる。月に對して抱くそのような心情が、謝朓という實在の歴史的人物のイメージを借りて具體的に反映したのが、先の「金陵城西月下吟」の詩である。別の作品でいえば、姑蘇臺の前に吳王夫差の往昔を懷古した「蘇臺覽古」（卷二十二）も、同じ意味で同系列に屬する詩である。

舊苑荒臺楊柳新 舊苑荒臺 楊柳新たなり

菱歌清唱不勝春 菱歌の清唱 春に勝たえず

只今惟有江西月 只今 惟だ有り江西の月

曾照吳王宮裏人 曾て照らす 吳王宮裏の人

ここでの「古人」は、「吳王宮裏の人」という表現で暗示

される、あの西施にほかならない。

ここでもう一度、「金陵城西月下吟」に返ろう。李白は、「解道澄江淨如練」、つまり「澄江は淨きこと練の如し」とは全くいい得て妙だと感歎を發しているが、これはくだんの謝朓の句を、月夜の情景として解していることを意味する。ところが、もとの謝朓の作は、詩題に「晚登三山」といい、また共に一聯を構成する前の句に「餘霞」の語があるように、夕暮れの光景を詠っており、全篇のどこにも月は現われていない。いったい謝朓の紋景の詩で最も特色ある景觀は、薄暮の光景であり、そこには彼の内面が深い思い入れを以て託されている。すなわち李白の月の描寫がきわ立つた特色を持つと同じ意味で、謝朓の夕暮れの描寫は獨自性を發揮しているのである。だから廣く人口に膾炙する先の一聯にしても、代表的な美しい晩景として人々の腦裏には刻印されていると考えて當然ではないか。だが、事實はどうであれ、「澄江淨如練」は、李白にとってあくまで月夜の情景でなければならなかったふしがある。というのは、月と謝朓との結びつきがこのほかにも一再ならず見

月明の中の李白（輿膳）

出されるからだ。「秋夜板橋浦汎月獨酌懷謝朓」（秋夜、板橋浦にて月に汎びて獨酌し、謝朓を懷う。卷二十二）は、その一つである。

天上何所有	天上 何の有る所ぞ
迢迢白玉繩	迢迢として玉繩白し
斜低建章闕	斜めに建章の闕に低れ
耿耿對金陵	耿耿として金陵に對う
漢水舊如練	漢水 舊より練の如く
霜江夜清澄	霜江 夜 清澄たり
長川瀉落月	長川 落月に瀉ぎ
洲渚曉寒凝	洲渚 曉寒凝る
獨酌板橋浦	獨酌す 板橋浦
古人誰可徵	古人 誰か徵す可き
玄暉難再得	玄暉 再びは得難し
灑酒氣填膺	酒を灑いで氣は膺に填つ

この詩では、題名において早くも月と謝朓が登場する。ここでも月を眺めながら謝朓のことを思いやっているのである。それに最初の四句は、明らかに謝朓「暫く下都に使

いし、夜に新林を發して京邑に至らんとし、西府の同僚に贈る」『文選』卷二十六の次の句に據っている。

金波麗鳩鵲 金波 鳩鵲に麗なり

玉繩低建章 玉繩 建章に低る

玉繩は、玉衡すなわち北斗七星の第五星の北二星。それが建章宮の上に低れているという情景である。因みに詩題の「板橋」も、謝朓ゆかりの地にほかならない。謝朓詩の讀者なら、誰でもすぐに「宣城に之かんとして新林浦を出で板橋に向かう」『文選』卷二十七を思い出すにちがいない。このように、この詩では冒頭からすでに謝朓を連想させる装置がふんだんに用いられているが、それをさらに決定的にするのが續く二句、「漢水 舊より練の如く、霜江 夜 清澄たり」であろう。ここで又してもあの謝朓の「餘霞散成綺、澄江淨如練」が、エコーとして聞えてくる。「舊如練」というのは、「謝朓の詩に描かれている通り昔からそうだった」との意味あいではないか。そうすれば、ここでも謝朓の例の句が、やはり月夜の情景として想起されていることになる。

それに續いて川面に映る月が描き出され、その中で獨り杯を銜む自分の姿が初めて現われる。月を眺め、酒を飲みつつ思い出されるのは、ここでも現在どこか遠隔の地にいる人物ではなく、古人である。「古人誰か徵す可き」、古人の中で誰を呼びよせようかという問いかけに答えるように出てくる名は、これまでの伏線からも豫想される謝朓その人。「酒を灑ぐ」のは、もちろんこの敬愛する先達を弔うんがためである。

月光を湛えて美しく廣がる水面を「練」になぞらえる發想は、他の詩にも見られる。「秋浦歌」其十二（卷八）はその一つである。

水如一匹練 水は一匹の練の如く

此地即平天 此の地即ち天に平らかなり

耐可乘明月 耐るむ明月に乗じ

看花上酒船 花を見て酒船上る可し

また「泛沔州城南郎官湖」（沔州城南の郎官湖に泛ぶ。卷二十）の序には、「夜、水月は練の如く、清光掇ひらう可きにあたる」の句があり、練の比喩を李白がことのほか愛好したことを

さらに印象づけられる。王琦注は、「秋浦歌」については、『論衡』の「其の上は一匹の練の状なるが若きを見る」を、郎官湖に泛ぶ詩については、梁元帝「春別應令」其一（『玉臺新詠』卷九）の「昆明の夜月 光は練の如し」を、それぞれ典拠として挙げる。なるほどこれらの先行例によって、練を用いた比喻がかなり早くから存在することは知られる。しかし、李白の詩がかかる先人の用例から直接思いつかれたかという点、それはいささか疑問である。これらの句を得たとき、李白はやはり謝朓の「澄江淨如練」をより多く意識に上せていたのではあるまいか。それほど李白の詩における月と謝朓との間には、強い絆が感じられるのである。

「謝公亭」（卷二十二）は、原注に「蓋し謝朓・范雲の遊ぶ所」とある通り、宣城太守時代の謝朓が、零陵内史となつて任地に赴く范雲を送別した場所での作であり、謝朓に「新亭の渚にて范零陵に別る」詩一篇（『文選』卷二十）のあつてゐることが想起されていたにちがいない。

謝亭離別處 謝亭 離別の處  
風景每生愁 風景 毎に愁を生ず

月明の中の李白（興膳）

客散青天河 客散す 青天の月  
山空碧水流 山空しくして碧水流る  
池花春映日 池花 春 日に映じ  
窗竹夜鳴秋 窗竹 夜 秋に鳴る  
今古一相接 今古 一たび相い接すれば  
長歌懷舊遊 長歌して舊遊を懷う

この謝朓にちなむ古跡を詠するに當つても、空にはまた月が懸かっている（謝朓の上掲の詩では、月に全く言及されないことに留意）。そしてこの情景の中で「今古」の時間が一つに融けあい、李白はかつて謝朓が范雲を餞別した「舊遊」を遙かに回顧して、一しきり感慨に浸るのである。この詩と趣きを通わせる「姑熟十詠」の「謝公宅」（卷二十二）は、王注に引く『太平寰宇記』によれば、太平州當塗縣の東三十五里に位置する青山に、やはり宣城時代の謝朓が營んだ邸宅をうたっている。

青山日將暝 青山日 將に暝れんとし  
寂寞謝公宅 寂寞たり謝公の宅  
と、まず夕暮れの中でひっそりと静まった謝朓の舊宅を

寫し出したあと、引き續いて、

竹裏無人聲 竹裏 人聲無く

池中盧月白 池中 盧月白し

と、池の面に影を落した月を點出している。李白から四

百年後にこの地を訪れた陸游が、『入蜀記』乾道五年（一一

六九）七月十七日の項で、「庵前に小池有りて謝公池と曰う。

水の味は甘く冷やかにして、盛夏と雖も竭きせず」（卷三）

というのは、この池のことである。またそのすぐ後に、

「絶頂に又た小亭有り、亦た謝公亭と名づく」とあるのは、

すでに見た謝朓が范雲を送別した亭らしい。

以下、同様に明月と謝朓が相い伴って描かれる詩を列舉

すると、まず「新林浦阻風寄友人」（新林浦にて風に阻まれ友

人に寄す。卷十三）では、全十八句の中間で――

海月破圓景 海月、圓景を破り

孤蔭生綠池 孤蔭、綠池に生ず

と海上に浮かぶ月のイメージが現われたあと、尾聯で

は――

明發新林浦 明に新林浦を發し

空吟謝朓詩 空しく吟ず 謝朓の詩

と、新林浦の地に因む謝朓のことがここでも偲ばれる

（七八ページ参照）。「新林」は一に「板橋」に作るが、謝朓

ゆかりの地名であることに變りはない。「三山望金陵寄殷

淑」（三山より金陵を望み殷淑に寄す。卷十四）では、前詩とは

逆に、全八句の發端にまず――

三山懷謝朓 三山に謝朓を懷い

水澹望長安 水澹として長安を望む

と、謝朓のことが回想される。「三山」は、これも謝朓

がここに登って「京邑を還望」した山であり（七六ページ參

照）、いま李白は謝朓と全く同じ地に在って、彼のかつての

境地を追體驗しようとするかのように、一篇の筆を起して

いる。そして句を隔てて、月明の情景が現われる。

盧龍霜氣冷 盧龍 霜氣冷やかに

鳩鵲月光寒 鳩鵲 月光寒し

「盧龍」は、盧龍山。「鳩鵲」は、もともと漢の甘泉宮に

在った樓觀の名だが、ここではそんなことより、謝朓の詩

に「金波 鳩鵲に麗なる」の句のあることの方が重要であ

る（七八ページ参照）。「金波」は、もちろん月光である。すなわち樓閣を照らす月色のシーンも、謝朓の詩から想を得たことになる。

「送儲邕之武昌」<sup>(2)</sup>（儲邕の武昌に之くを送る。卷十八）では、その樓閣を鮮やかに照らし出す月光の描寫から始まる。

黃鶴西樓月 黃鶴 西樓の月、

長江萬里情 長江 萬里の情

送別の相手儲邕はこれから武昌に赴こうとするのだが、そこは三十年前、李白も遊んだ思い出の地であり、遠い記憶がある空虚な響きを伴って回想される。「春風 三十たび度り、空しく憶う 武昌城」。盡きせぬ惜別の情に浸りつつ、君が経てゆく道中の情景を想像する。

湖連張樂地 湖は樂を張る地に連なり

山逐汎舟行 山は舟を汎ぶる行を逐う

ところで、つとに王琦の注に指摘があるように、前句の「湖連張樂地」は、謝朓「新亭の渚にて范零陵に別る」の首聯――

洞庭張樂地 洞庭は樂を張るの地

月明の中の李白（興膳）

瀟湘帝子游 瀟湘は帝子の遊びしところ

を明らかに踏まえている（注4参照）。もちろん典籍としては、『莊子』天運篇の「帝（黃帝）は咸池の樂を洞庭の野に張る」が本になっているのだが、李白の場合、ここでもやはり直接には謝朓の詩が意識されていると斷言してはばからない。それはすぐ後に連なる二句で、謝朓の名がじかに表出されることから確かめられる。

諾謂楚人重 諾は謂う 楚人の重きを

詩傳謝朓清 詩は傳う 謝朓の清きを

季布の一諾の重みと共に、謝朓の詩の清らかさが、儲邕への賛歎を含むのは當然だが、その「清」が起句の「西樓の月」からおのずと導き出されて謝朓のイメージに重なりあうのも、これまでの一連の検討からすれば、無理なく理解できるのではあるまいか。月光が「清」の語を以て形容されるように、謝朓の詩もまた「清」なる趣きによって李白に愛された。有名な「宣州謝朓樓餞別校書叔雲」（宣州謝朓樓にて校書叔雲に餞別す。卷十八）が――

蓬萊文章建安骨 蓬萊の文章 建安の骨

中間小謝又清發 中間の小謝、又た清發

と謝朓の「清發」に自己を同化させつつ、續いて、

俱懷逸興壯思飛 俱に逸興を懷いて壯思飛び

欲上青天覽明月 青天に上りて明月を覽らんと欲す

と明月のイメージに連環してゆく例を想起してもらえば、

おそらく十分に納得がゆくだろう。

「澄江淨如練」は、いわば薄暮の「清」である。この句

に代表されるような謝朓の清澄な感覺を、李白は明月の

「清」に變換しながら自己の作品に取りこんでいったよう

に、私には考えられる。

#### 四

李白が明月を仰ぎつつ對話を交わした古人は、決して謝

朓だけではない。東晉の風流貴族として著名な庾亮も、ま

たその一人である。「陪宋中丞武昌夜飲懷古」(宋中丞に陪し

て武昌に夜飲し古えを懷う。卷二十二)は、李白が恩顧を受け

た宋若思の幕中に在っての作で、この人物を形象するに當

って、李白は庾亮のイメージを持ちきっている。

清景南樓夜 清景 南樓の夜

風流在武昌 風流 武昌に在り

庾公愛秋月 庾公、秋月を愛し

乘興坐胡牀 興に乗じて胡牀に坐る

龍笛吟寒水 龍笛 寒水に吟じ

天河落曉霜 天河 曉霜に落つ

我心還不淺 我が心 還た淺からず

懷古醉餘觴 古えを懷いて餘觴に酔う

「庾公」は、すなわち宋中丞の比擬だが、この宴席の上

には秋の明月が浮かんでいる。原據となった庾亮の故事は

『世說新語』容止篇に見え、いかにも東晉の名流人士らし

い風貌を如實に傳える。

庾太尉の武昌に在りしとき、秋夜 氣佳れ景清し。使

吏の殷浩・王胡之の徒、南樓に登りて詠を理む。音調始

めて適えるに、函道中に屢の聲の甚だ厲しきを聞く。定

らんや是れ庾公の、俄かにして左右十許りの人を率いて

歩み來たれるなり。諸賢起ちて之を避けんを欲するに、

公徐ろに云えらく、「諸君、少しく止まれ。老子は此處



に於て興復た淺からず」と。因りて便ち胡牀に據り、諸人と詠い誦れ、坐を竟うるまで甚だ樂しみに任すを得。

右の訓み下し文中に傍點を施したように、李白は原話の語彙を少なからず導入して、詩中に生かしており、それは「懷古」というモチーフの上で確かに効果を擧げている。

ところで、詩の狀況設定は、例によって月を仰ぎつつ遙かに時間を隔てた「庾公」を想起するという形になっているのだが、『世説』の故事には單に「秋夜氣佳景清」とあるだけで、月が出ていることははっきりとは述べられていない。

だから、王琦が『世説』の古本では、「秋夜」が「秋月」に作られていたのかも知れないと疑うのも、ある意味ではまことにもっともである。しかし、原話の字句の異同がどうであれ、李白の心情においては、ここは最初から秋月の照りわたる情景として發想されていたのではなかったか。すなわち謝朓詩の薄暮が月夜に變換されたのと同趣の移しかえが、作者の意識下ですでになされていたというわけである。

王琦は、『世説』『晉書』の庾亮南樓の事を載するに、皆

月明の中の李白（輿膳）

な秋月を言わざるも、太白は數しば之を用う」というが、事實李白は他の詩中でも庾亮の故事のアリニュージョンを常用している。先に謝朓との關連で言及した「泛沔州城南郎官湖」（七八ページ）は、夜郎に流される途中の沔州で、古なじみの張謂と出會い、共に一夜の歡を盡した折りの作だが、その歌い出しは次のようにして始まる。

張公多逸興 張公 逸興多

共泛沔城隅 共 沔城の隅に泛ぶ

當時秋月好 當時 秋月好し

不減武昌都 武昌の都にも減らず

沔州の上に懸かる秋月の好さを歎賞するのに、そのかみの武昌における庾亮南樓の故事が引きあいに出されていることは疑いない。またこれもすでに引いた「送儲邕之武昌」（八一ページ）でも、「黃鶴 西樓の月、長江 萬里の情」と、いま頭上に浮かぶ月をまず寫し出したあと、「春風 三十たび度り、空しく憶う 武昌城」と、儲邕の赴く武昌の地へと思いを馳せる。武昌が李白曾遊の地であることのほかに、「西樓の月」が庾亮南樓の遊びとの間に一種のイメー

ジ連鎖を生じていると考えるべきであるまいか。

庾亮と同時代の東晉の文人袁宏も、やはり『世說新語』の故事を通じて、李白の詩に明月と共に姿を現わす人物である。「勞勞亭歌」(卷七)は、原注に「江寧縣の南十五里に在り、古えの送別の所にして、一名は臨滄觀」とある亭での作だが、その後半四句にはいふ。

昔聞牛渚吟五章 昔聞く 牛渚に五章を吟ぜしを

今來何謝袁家郎 今來 何ぞ袁家の郎に謝らん

苦竹寒聲動秋月 苦竹の寒聲 秋月を動かし

獨宿空簾歸夢長 獨り空簾に宿して歸夢長し

「牛渚」の故事は、次に引く『世說』文學篇に據っている。なお、牛渚は、別名を采石磯といい、安徽省の馬鞍山市に屬する名勝。

袁虎(虎は袁宏の小時の字)は少きとき貧しく、嘗て人の爲に傭載して租を運ぶ。謝鎮西(尚)經て船行するに、其の夜 清風朗月、江渚の間の估客船の上に詩を詠ずる聲有りて、甚だ情致有り。誦する所の五言は、又た其の未だ嘗て聞かざる所なれば、歎美して已む能わず。即ち委

曲しく訊問せしむれば、乃ち是れ袁の自ら其の作る所の「詠史詩」を詠ぜしなり。此に因りて相い要え、大いに相い賞し得たり。

袁宏はこの「詠史詩」がきっかけとなって謝尚に拔擢されたのだから、一種の立身出世譚ともいえる。この場合は原話にも確かに「朗月」が輝いているのだが、かつて袁宏が謝尚に出會つた夜と同様に、いま水邊には秋の月が冴えわたっている。この自分とて袁宏に決してひけをとらぬ詩才を持つと自負しているが、殘念なことにそれを見抜いてくれる謝尚のような人物に恵まれず、あたら秋の良夜をこのように空しく送っている。かく袁宏の故事を逆用して、自らの牢騷を發するところに眞意がある。

「夜泊牛渚懷古」(夜、牛渚に泊して古えを懷う。卷二十二)は、袁宏ゆかりの牛渚で、先の詩と同じモチーフを詠じたもの。原注に、「此の地は即ち謝尚の袁宏『詠史』を聞きし處」とある。

牛渚西江夜 牛渚 西江の夜

青天無片雲 青天 片雲無し

登舟望秋月 舟に登りて秋月を望み

空憶謝將軍 空しく憶う 謝將軍

余亦能高詠 余も亦た高詠を能くするも

斯人不可聞 斯の人 聞くを得ず

明朝挂帆席 明朝 帆席を挂けなば

楓葉落紛紛 楓葉 落ちて紛紛たらん

詩中に袁宏の名が見えないのは、李白自らが袁宏のイメ

ージと一つに融合しきっているからである。舞臺は牛渚、

そして袁宏はここに秋月と共に實在するのに、彼の「詠史

詩」を聞くはずの謝尙だけが缺けているこの空しさ。空虚

な思ひは、尾聯に提示される放浪への旅立ちでわずかに補

償されるほかはない。

『世説』の故事に關連する月の詩としては、さらに「望

月有懷」(月を望みて懷い有り。卷二十三)を擧げることがで  
きる。

清泉映疎松 清泉 疎松に映じ

不知幾千古 幾千古なるやを知らず

寒月搖清波 寒月、清波に搖れ

月明の中の李白(興膳)

流光入窗戶 流光 窗戶に入る

對此空長吟 此に對して空しく長吟す

思君意何深 君を思いて意何ぞ深き

無因見安道 安道を見るに因無く

興盡愁人心 興盡きて人心を愁えしむ

「安道」とは、東晉の戴逵、字は安道のこと。原話は、

『世説』任誕篇に見える。

王子猷(徽之) 山陰に居りしとき、夜大いに雪ふる。

眠りより覺めて、室を開き、命じて酒を酌むに、四望皎

然たり。因りて起ちて彷徨し、左思が「招隱詩」を詠ず

るに、忽ち戴安道を憶う。時に戴は刻に在れば、即便ち

夜に小船に乗って之に就く。宿を経て方めて至るも、門

に造りて前まずして返る。人其の故を問うに、王曰く、

「吾本と興に乗じて行き、興盡きて返る。何ぞ必ずしも

戴を見ん」と。

詩題に「月を望みて懷い有り」とある通り、月を仰ぎつ

つ誰か遠くにいる友人のことを思いやったのであり、戴安

道に對する王子猷の關係をそこに對置している。原話の王

子猷は雪景色を見たことがきつかけとなって戴安道を思い出したのだが、李白は「寒月」の光から、「安道」に擬せられる友人を思ふのである。雪と月の皎然たる光は、それを發する本體は別物であっても、李白の思考にあつてはおのずと一つの作用として機能している。王子猷の故事を月夜の話として、李白が誤解していたわけではない。「淮海對雪贈傅霰」(淮南にて雪に對して傅霰に贈る。卷九)では、「興は剡溪に從いて起り、思ひは梁園を繞りて發す」と、王子猷の逸事を謝惠連「雪賦」(『文選』卷十三)の梁王兔園の雪景と對應させていることから、それは疑うべくもあるまい。但し、この詩でも一面の雪景色を描くに當つて、「海樹陽春を成し、江沙明月に皓し」と、月光が引きあいに出席されていることは留意しておいてよい。(この「皓月白」は、實景としての月光よりは、明月の光に照らされたように白く輝かしい雪のことをいうのであろうが)。

同じく雪景を描く「對雪醉後贈王歷陽」(雪に對して醉後、王歷陽に贈る。卷十二)も、中間に王徽之の故事を點出してゐる。

子猷聞風動窗竹 子猷は風の窗竹を動かすを聞き  
相邀共醉杯中綠 相い邀えて共に酔う 杯中の綠  
この雪中の歡宴に存分に興を盡したあと、一夜明ければ  
主客はまた別れ別れの身となる。

清晨鼓棹過江去 清晨 棹を鼓し江を過ぎりて去き  
千里相思明月樓 千里 相い思はん 明月樓

詩の最後は、遠い距離を乗り越えて心と心をついに結び合わせる「明月」への連想によつて、互いの友情の不變を詠っている。

庾亮・袁宏・謝尚・王徽之・戴逵と、明月に關連してこの章で取り上げてきた古人はいずれも東晉の名士たちであったが、最後にもう一人、彼らと並ぶ東晉の風物人物謝安を詠じた詩に言及しておこう。「憶東山」(東山を憶う。卷二十三)其一是、王注によれば、上虞縣の西南四十五里の東山に在った謝安の故宅を追憶するもの。李白が長安での宮仕えを失脚して、都を離れようとする時期の制作に繋けることで、近代諸家の見解もほぼ一致している。<sup>81)</sup>

不向東山久 東山に向かわざること久し

薔薇幾度花さく

白雲他自散<sup>82</sup> 白雲は他<sup>か</sup> 自ずから散ず

明月落誰家 明月、誰が家にか落つ

この「明月」は、詩の作られた時點で必ずしも空に上っていることを要しないだろうが、謝安を追憶するための媒介としてそれが現われることに變りはない。月を媒介として對話を交わす古人の多くがかくの如く東晉の人物であるという事實は、やはり李白において偶然の現象ではないと思われる。彼らの機知に富み、往々にして常識離れのした風流に、李白が大いなる敬意と共感を示したことを、それは物語っていよう。李白の精神世界の中で、明月と東晉の風流人物とは、まことによく似あった存在だったのだ。<sup>83</sup>

さて、月を媒介として時間軸をさかのぼり古人を追憶するという發想が李白の獨壇場であり、他の唐詩人に同趣の例が乏しいことは、これまですでに述べてきた通りである。しかし、また一方、それほど稀少な發想法であれば、李白の後輩の詩人たちの間で、その趣きに倣おうとする試みがあったても不思議ではない氣がする。そうした面での李白の

影響はなかったのかどうか。現在のところ私はまだ詳しい調査を果していないので、結論めいたことはいえないが、大曆十才子の一人錢起（七二三〜七八〇?）に次のような句の存することは、注目しておいてよいであろう。<sup>84</sup>

(1) 望舒三五夜 望舒 三五夜

思盡謝玄暉 思い盡す 謝玄暉

「寄鄂州郎士元使君」（卷四）

(2) 夜來詩酒興 夜來 詩酒の興

月滿謝公樓 月は滿つ 謝公の樓

「裴迪南門秋夜對月」（卷四）

(3) 遙知謝公興 遙かに知る 謝公の興

微月在江樓 微月 江樓に在り

「奉送劉相公江淮催轉運」<sup>85</sup>（卷六）

いずれも月と並んで謝朓のことが詠ぜられており、(1)と(3)は高仲武『中興閒氣集』にも採録されている。錢起といえば、詩風からはむしろ王維と近く、李白とは全く異質の詩人と見るのが通常の評價であろう。だが、「謝公」という、謝朓を指す李白の特徴的な語彙が用いられているとこ

ろを見ると、やはり李白の詩がここに何がしか影を落しているとしてよいのかも知れない（七九ページ参照）。(1)(2)は満月の光だが、(3)は「微月」であって、李白の世界とはすでに異なっている。『錢考功集』を大まかに一わたり眺めた印象では、錢起は微月をかなり好んで取り上げた詩人のようである。「果して相思の字有り、銀鉤、新月、開く」〔新雨喜得王卿書問、卷二〕、「片月、堦に臨みて早く、晴河、雁を度して高し」〔秋夜寄袁中丞王員外、卷四〕、「驚蟬、暗柳より出で、微月、迴廊に隠る」〔靜夜通上人問疾、卷四〕、「離居、新月を見る、那ぞ君を思わざるを得ん」〔送李秀才落第遊荆楚、卷五〕、「清吟、客を送る後、微月、城に上る初め」〔過王舍人宅、卷七〕などは、その例である。こうした微月の愛好は、錢起の詩人としての資質の一端を暗示しているかも知れない。

ところが、その彼が一方ではまた謝朓を敬慕したらしい。「春來 此の幽興、宛も是れ謝公の心」〔春谷幽居、卷五〕、「江山 麗藻を飛ばし、謝朓 前名を譲る」〔奉和宣城張太守南亭秋夕懷友、卷六〕、「當時 好風物、誰か謝宣城に伴わ

ん」〔江行無題一百首「其九十六」といった句は、いずれも錢起が彼獨自の立場から、謝朓の詩境に心を寄せていたことを示しているよう。その面で、彼が李白に強く共感するところがあったとしても、不思議ではない。ともあれ、詩人としての資質においては大きく異なる錢起が、明月を媒介として古人を追憶するというすぐれて李白的な詩想を、たとえ部分的にもせよ繼承しようとしていたことは、やはり一つの興味ある現象といつてよいであろう。

# 注

(1) 武部利男「李白の詩における月の比喩」〔『入矢教授小川教授退休記念中國文學語學論集』一九七四年。のち『李白の夢』、一九八二年、筑摩書房〕。

(2) 姫默「李白與月亮」〔『中日李白研究論文集』、一九八九年、中國展望出版社〕。

(3) 松浦友久『李白——詩と心象』(一九七〇年、社會思想社)に、「月光——ひかりとかげ」の章がある。また同氏の「李白における思考の形態」〔『李白研究——抒情の構造』、一九七六年、三省堂)にも、月光の問題を取り上げた章がある。

(4) 陳風「月出」の第一章に、「月出皎兮、佼人僚兮。舒窈窕兮、勞心悄兮」。傳に、「興也。皎、月光也」。箋に、「興也。

喻婦人有美色之白晳」。

- (5) 「纖纖如玉鉤」の句について、李善注は『西京雜記』の載せる公孫乘「月賦」の「値圓巖而似鉤、蔽脩堞如分鏡」を引くが、この書の制作時期には問題があるので、そのまま典據として認めるのはためらわれる。鮑照の同時代の詩人では、謝靈運「七夕詠牛女」の「火逝首秋節、明經弦月夕。月弦光照戶、秋首風入隙」が、数少ない例として挙げられる。

- (6) 吉川幸次郎全集第十二巻杜甫篇所收。

- (7) 葛立方「韻語陽秋」巻十に、「月輪當空、天下之所共視、故謝莊有『隔千里兮共明月』之句。蓋言人雖異處、而月則同瞻也」といい、「月夜」を始めとする杜詩を引いて、「其數致意於閨門如此、其亦謝莊之意乎」と述べている。

- (8) 明・劉侗『帝京景物略』巻二春場（一九八〇年、北京古籍出版社版）に、「八月十五日祭月、其祭果餅必圓、分瓜必牙錯瓣刻之、如蓮華。……月餅月果、咸屬餽相報、餅有徑二尺者。女歸寧、是日必返其夫家、曰團圓節也」。この日に食べる月餅をまた「團圓餅」と稱する。清・富察敦崇『燕京歲時記』（一九八一年、北京古籍出版社版）月餅の項に、「至供月、月餅到處皆有。大者尺餘、上繪月宮蟾兔之形。有祭畢而食者、有留至除夕而食者、謂之團圓餅」。

- (9) 『新唐書』巻六肅宗紀に、「至德二載十二月、以蜀郡爲南京、鳳翔郡爲西京、西京爲中京」。同巻三十七地理志に、「上都、初曰京城、天寶元年曰西京、至德二載曰中京、上元二年

月明の中の李白（與膳）

復曰西京、肅宗元年曰上都」。安旗主編『李白全集編年注釋』（一九九〇年、巴蜀書社）が、上記『新唐書』の記述により、この詩を上元元年（七六〇）に繋げるのにひとまず従う。郁賢皓選注『李白選集』（一九九〇年、上海古籍出版社）は、乾元二年（七五九）、江夏での作とする。

- (10) 王琦注に引く嚴羽の評に、「是歌當識其主伴、變幻之法。題立峨眉作主、而以巴東三峽・滄海・黃鶴樓・長安陌・秦川・吳越伴之、帝都又是主中主。題用月作主而以風雲作伴、我與君又是主中主。迴環散見、映帶生輝、真有月映千江之妙。巧轉如蠶、活變如龍、迴身作藕、噓氣成雲、不由思議造作」。

- (11) 涼風度秋海、吹我鄉思飛。連山去無際、流水何時歸。目極浮雲色、心斷明月暉。芳草歇柔艸、白露催寒衣。夢長銀漢落、覺罷天星稀。含悲想舊國、泣下誰能揮。

- (12) 「即『將心寄明月、流影入君懷』意、出以搖曳之筆、語意一新」（『唐詩別裁集』巻二十）。

- (13) 我隨秋風來、瑤草恐衰歇。中途寡名山、安得弄雲月。渡江如昨日、黃葉向人飛。敬亭慙素尚、弭棹流清輝。冰谷明且秀、陵巒抱江城。繁榮吳興史、衣冠耀天京。水國饒英奇、潛光臥幽草。會公眞名僧、所在即爲寶。開堂振白拂、高論橫青雲。雲山掃粉壁、墨客多新文。爲余話幽棲、且述陵陽美。天開白龍潭、月映清秋水。黃山望石柱、突兀誰開張。黃鶴久不來、子安在蒼茫。東南焉可窮、山鳥飛絕處。稠疊千萬峰、相連入雲去。聞此期振策、歸來空閉關。相思如明月、可望不可攀。

何當移白足，早晚凌蒼山。且寄一書札，令予解愁顏。

(14) 寶刀裁流水，無有斷絕時。妾意逐君行，纏綿亦如之。別來門前草，秋巷春轉碧。掃盡更還生，萋萋滿行跡。鳴鳳始相得，雄鷲雌各飛。遊雲落何山，一往不見歸。估客發大樓，知君在秋浦。梁苑空錦衾，陽臺夢行雨。妾家三作相，失勢去西秦。猶有舊歌管，淒清聞四鄰。曲度入紫雲，啼無限中人。妾似井底桃，開花向誰笑。君如天上月，不肯一回顾。窺鏡不自識，別多憔悴深。安得秦吉了，爲人道寸心。

(15) 同書「哭晁卿衡」的賞析。同書にはまた、唐人が日本の使者や僧を送る詩ではよく明月に言及することがあると述べて、晚唐・韋莊の「送日本國僧敬龍歸」の、「此去與師誰共到，一船明月一帆風」を舉げる。なお Arthur Waley 氏は、「明月」の一句を、「To his bright moon he never returned, perished in the grey sea」と譯し、「明月」を日本國そのものの意に解している (The Poetry and Career of Li Po, 1950, George Allen and Unwin Ltd. 邦譯『李白』、小川環樹・栗山稔譯、一九七三年、岩波新書)。

(16) 拙稿「謝朓詩の抒情」『東方學』第三十九輯、一九七〇年参照。

(17) 同趣の句として、沈約「八詠」二首其一「望秋月」の冒頭にも、「望秋月、秋月光如練。照輝三爵臺、徘徊九華殿」がある。

(18) 洞庭張樂地、瀟湘帝子遊。雲去蒼梧野、水還江漢流。停驂

我悵望、輟棹子夷猶。廣平聽方籍、茂陵將見求。心事俱已矣、江上徒離憂。

(19) 青山日將暝、寂寞謝公宅。竹裏無人聲、池中虛月白。荒庭

衰草偏、廢井蒼苔積。唯有清風閑、時時起泉石。

(20) 潮水定可信、天風難與期。清晨西北轉、薄暮東南吹。以此

難挂席、佳期益相思。海月破圓景、孤蔭生綠池。昨日北湖梅、

開花已滿枝。今朝白門柳、夾道垂青絲。歲物忽如此、我來定

幾時。紛紛江上雪、草草客中悲。明發新林浦、空吟謝朓詩。

(21) 三山懷謝朓、水滸望長安。燕沒河陽縣、秋江正北看。盧龍

霜氣冷、鵲鵲月光寒。耿耿憶瓊樹、天涯寄一歡。

(22) 司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)に、「鑿石闕、歷封禪、過鵲鵲、望露寒」とあり、注に張揖の説として、「此四觀、武帝建元中作、在雲陽甘泉宮外」という。

(23) 黃鶴西樓月、長江萬里情。春風三十度、空憶武昌城。送爾

難爲別、銜杯惜未傾。湖連張樂地、山逐汎舟行。諸謂楚人重、

詩傳謝朓清。滄浪吾有曲、寄入棹歌聲。

(24) 琦按、『世說』『晉書』載庾亮南樓事、皆不言秋月、而太白

數用之。豈古本「秋夜」乃「秋月」之訛、抑有他傳是據歟。

(25) 張公多逸興、共泛沔城隅。當時秋月好、不減武昌都。四坐

醉清光、爲歡古來無。郎官愛此水、因號郎官湖。風流若未減、

名與此山俱。

(26) 金陵勞勞送客堂、蔓草離離生道旁。古情不盡東流水、此地

悲風愁白楊。我乘素舸同康樂、朗咏清川飛夜霜。昔聞牛渚吟

悲風愁白楊。我乘素舸同康樂、朗咏清川飛夜霜。昔聞牛渚吟

悲風愁白楊。我乘素舸同康樂、朗咏清川飛夜霜。昔聞牛渚吟

悲風愁白楊。我乘素舸同康樂、朗咏清川飛夜霜。昔聞牛渚吟

悲風愁白楊。我乘素舸同康樂、朗咏清川飛夜霜。昔聞牛渚吟

悲風愁白楊。我乘素舸同康樂、朗咏清川飛夜霜。昔聞牛渚吟

悲風愁白楊。我乘素舸同康樂、朗咏清川飛夜霜。昔聞牛渚吟

悲風愁白楊。我乘素舸同康樂、朗咏清川飛夜霜。昔聞牛渚吟



五章、今來何謝袁家郎。苦竹寒聲動秋月、獨宿空簾歸夢長。

(27) 『世説』の劉孝標注に引く『續晉陽秋』では、この故事の舞臺を牛渚とし、次のように記す。「鎮西謝尚、時鎮牛渚、乘秋佳風月、率而與左右微服泛江」。

(28) 朔雪落吳天、從風渡溟渤。海樹成陽春、江沙皓明月。興從剡溪起、思繞梁園發。寄君郢中歌、曲罷心斷絕。

(29) 「雪賦」は、「歲將暮、時既昏、寒風積、愁雲繁、梁王不悅、游於兔園」と、漢の梁孝王の苑囿を賦の舞臺として設定する。

(30) 有身莫犯飛龍鱗、有手莫撻猛虎鬚。君看昔日汝南市、白頭仙人隱玉壺。子猷聞風動窗竹、相邀共醉杯中綠。歷陽何異山陰時、白雪飛花亂人目。君家有酒我何愁、客多樂酣秉燭遊。謝尚自能鸚鵡舞、相如免脫鵝羈裘。清晨鼓棹過江去、千里相思明月樓。王琦は「明月樓」の典據として、吳均詩（「酬聞人侍郎別詩」三首其二）の、「相思自有處、春風明月樓」を引く。

(31) 詹鏐『李白詩文繫年』に、「此詩蓋遭謗以後將還山時作也」。安旗主編『李白全集編年注釋』は、この詩を天寶二年（七四三）に繫ける。

(32) 王注本は「他」を「還」に作るが、宋本に従って改める。

(33) 他の晉人を追憶する句としては、「題金陵王處士水亭」（卷二十五）の、「北堂見明月、更憶陸平原」があり、王琦は陸機「擬明月何皎皎」（『文選』卷三十）の「安寢北堂上、明月入

月明の中の李白（興膳）

我牖。照之有餘暉、攬之不盈手」を舉げる。

(34) 以下の錢起の詩は、『錢考功集』（四部叢刊本）により、その卷數を附記する。

(35) 『中興閒氣集』（四部叢刊本）では、詩題を「裴迪書齋既月之作」に作り、後句は「月上謝公樓」に作る。

(36) 『中間閒氣集』では、詩題に「江淮」二字を缺く。

(37) 錢起が王維と親交を有したことはよく知られているが、王維の「送元中丞轉運江淮」や「留別錢起」が錢起の作として『錢考功集』に收められるような混同も生じている。後者は、『錢考功集』では「晚歸藍田酬王維給事贈別」と題される。

(38) 後句を『錢考功集』では「誰爲伴宣城」に作るが、いま『全唐詩』に従う。